BOOK

私は、走ろ

残念ながら、他人の著書では感動も上がらない。武装勢力の背後で大国や周辺国の権力者が利権に群がり、現状維持を決め込んでいる限り―。そんな著者のむなしさは、国連難民高等弁務官事務所の職員として現地にいた私もよく分かる。

それでも著者のように犠牲者を代弁することで、世界を少し変えることはできる。コンゴや世界の弱者のために、もっと頑張らなければ。本書を読んで勇気とパワーをもらった。

〈米川　正子＝立教大特任准教授〉

（英治出版・1995円）

静岡新聞社の本

手仕事が生む愛着ある小物

作家ものと暮らす

暮らしを豊かに彩る小粋な雑貨を扱う県内のショップ・オーナー10人がお気に入りの作家とその作品について語る。

陶器、ガラス器、アクセサリー小物…。オーナーが手仕事を見極め、一つ一つ丁寧に選んできた、いわゆる「作家もの」への愛情があふれる。

作り手の思いを受け止め、じっくり選びだした作品には、所有する人の暮らしに対する考え方さえ変える力がある、という。

このほか、県内作家9人の工房訪問インタビュー

自然と共に生きる作法 水窪からの発信

民俗学者の著者が30年以上にわたり足しげく通った北遠の小さな町、水窪町（現在の浜松市天竜区水窪町）と、作家もので演出された12カ月の生活の一こまをイメージ写真で提案する。

（静岡新聞社編・1470円）

の自然と人の営みを探った一冊。地道な現地踏査と人々への聞き取り取材を基に、山里で長く熟成された伝承や智恵、思想をたどる。水窪での自然と人との関わり方から、現代に生かすべき伝承知の活用や地方の再考を全国に発信している。

自然の景観、伝統食、生活道具など数多くの貴重な写真を多数収録し「ヤマの暮らし」も生き生きと描写した。

（野本寛一著・1995円）

自費出版のご相談は

静岡新聞社出版部〈☎054(284)1666〉まで

古市「僕たちの前途」の

ビ出演が増えても「楽屋裏には興味ありますが、番組で何か言っても瞬時に消費されるだけなので」と浮かれないのが古市流だ。

新著では若者の起業を取り上げた。「大学の同級生たちが大企業でつらそうに働く一方で、自分の会社で仕事を楽しむ子も多い。働くって何だろうと思ったんです」

全8章の前半はユニークな起業家を紹介するルポで構成。株式上場や名声を追わず、仲間と今を楽しみたいと語るプログラマーや、人と人をつなぎ「現代の祝祭」を仕切るプロデューサーらの〝生態〟を描いた。「若手起

若者の働き方 多

古市さん。研究者として、裏付けのない理想論を掲げることだけは避けたかったという。

「どれが正解かは言えないけど、モデルコースはいくつか示せたと思う。働き方について悩んでいる若い人には、この本を地図のように使ってほしい」と語る。前途は洋々にも多難にもなり得る。多様な道筋があると分かれば視界は開けるはずだ。「先は見えないけど、そのスリルを仲間と一緒に楽しんでしまおう。タイトルには、そんな思いを込めたつもりです」

〈[illegible]〉

〇円）

各地の本

★「幸福な田舎のつくりかた」（金丸弘美著）　地域に対する誇りが人をつなぎ、経済を動かす…。そんな〝まちおこしのトップランナー〟を数多く紹介している。若者の力でにぎわいが戻った熊本県阿蘇市のレトロ商店街。グリーンツーリズムで都会っ子を多く受け入れる長野県飯田市。時には田舎の不便さがアピールポイントになることも。とにかく地方を笑顔にするアイデアが詰まった一冊だ。（学芸出版社＝京都市・1890円）